31　貝原益軒（一六三〇―一七一四）の紹介

木村　専太郎

貝原益軒は、福岡黒田藩の儒学者であり、医学者としても、尊敬されている。

益軒の先祖は藤原氏の出身で、代々備中国備津宮の神職をつとめていた。益軒の祖父宗喜は、黒田官兵衛（隠居して如水という）に仕え、数々の功績をあげたので、官兵衛が豊前中津から筑前に移ったときは、千二百石の知行を与えられた。

父寛斎は右筆の人で、医学の心得もあり、典医としても仕えていた。

益軒は福岡城内東邸に、寛永七年（一六三〇）十一月十四日に、寛斎の五男として誕生した。諱（イミナ）は篤信であったが、通称助三郎であった。のちに久兵衛の名を賜った。また号は損軒といったが、晩年に益軒と号した。

益軒は幼少の頃から字の読み書きが出来、両親や兄を驚かせたという。

寛永二十年（一六四三）、益軒十四歳のとき、父に従い医書を読み、医薬と食物の性質にほぼ通じたという。

慶安二年（一六四九）、益軒は二十歳のとき、黒田家第二代藩主忠之に従い、海路長崎に赴いた。帰国後忠之の叱りを受けて、半月閉居。その後謁見不能の処分を受けた。さらに翌年さらに藩主の逆鱗に触れて、七年間の浪人生活をおくった。

この浪人中、益軒は長崎、大坂、京都、奈良を訪れ、多くの人々と交友し、多くのことを学んだ。この七年間は益軒の人間形成に非常に有益であったという。

明暦元年（一六五五）、益軒二六歳のとき、江戸に出発し、川崎の宿で剃髪して柔斎と名乗った。このとき生活のために病人を診察して、生活の糧とした。

明暦二年（一六五六）、益軒二七歳のとき、第三代藩主光之の命により出仕六人扶持を賜った。

京都に遊学したさい、山崎闇斎に、また故郷では木下

順庵に会い交友を深めた。そして向井元升に師事して医学を修めた。

新藩主光之は益軒の才能を非常に愛し、中国の書籍「中庸」や「孟子」を多くの人の前で講じる機会を与えた。寛文四年（一六六四）、益軒三五歳のとき、鳥飼（トリカイ）に宅を戴き、知行地一五〇石を賜まわった。鳥飼は現在福岡市中央区鳥飼であり、福岡ドームの近くで、益軒の菩提寺・金龍寺も鳥飼の近くの今川にある。

益軒三六歳のとき、益軒は学問の進路を「朱子学」に定め、鋭意研鑽を開始した。この年、「易学提要」と「読書順序」を著した。

寛文六年（一六六八）益軒三九歳のとき、十七歳年下の女性と結婚。婦人は秋月藩士江崎広道の娘であった。秋月は現在の福岡市郊外の甘木市にあり、秋月藩は黒田藩と姻戚関係にあった。益軒夫人はのちに東軒夫人と呼ばれた。益軒は二六歳以来僧体をしていたが、これを改め束髪俗体に復した。そのさい久兵衛の名を賜った。

寛文十一年（一六七一）、益軒四二歳のとき、藩主から黒田家の歴史を編纂する命を受け、七年後の延宝七年（一六七八）に有名な「黒田家譜」上下二巻を藩主光之に献上した。益軒は五十歳までに十七冊の著書を出版しているが、これは彼の著書活動の序の口であった。その後多くの著書を出版し、益軒は生涯に九九冊の本を上梓している。八十歳のとき有名な「大和本草」、八一歳のとき「学訓」と「和俗童子訓」など出版。

正徳三年（一七一三）八四歳のときに、益軒の著書の中でも一番有名な「養生訓」を著した。これは該博な知識と豊かな経験を下に、健康に過ごす知恵を庶民向けに書かれた「養生書」である。

発刊以来版を重ね、三百年間現代に至るまで、読み続けられている。

彼はまた旅行を大変愛し、いろいろの処を訪れ、自然美を楽しみ、歴史地理や博物などの見聞を広めた。その多くの場合東軒夫人が同伴された旅であったという。

（木村専太郎クリニック）